



# 月刊 千葉動力車

## 28名のハム労法解雇、ついに撤回

# この勝利を ストップに!

(上)

### はじめに

第一・二波スト解雇撤回闘争は、全員の解雇撤回という大きな勝利をかちとった。旧国鉄清算事業団当局は、東京高裁の場で、公労法による二八名の不当解雇を全て撤回し、第一波ストに対する三千六百万円の損害訴訟も取り下げたのである。動労千葉の闘いがついに敵を追いつめたのだ。



▲ 85年11月28日夜  
千葉運転区構内でのスト総決起集会

全員の解雇撤回は、当局が、二八名の不当処分をはじめ、国鉄分割・民営化攻撃が、国鉄労働運動を解体するための違法・不当な国家的不当労働行為であったことを認め、謝罪したに等しい大きな勝利だ。

そのみならず、国鉄労働運動の歴史のなかで、二八名もの公労法解雇を撤回させた闘いは前例がない。

政府・当局は、空前の不当解雇攻撃を加え、報復としての「業務移管」を強行し、人活し強配転攻撃や脱退工作など、まさに「嵐」という他ならないような攻撃をもって臨み、「これで動労千葉もおしまいだ」と夕力をくくっていた。政府や当局ばかりではない。総評傘下の多くの労働組合の指導部も善意からとは言え、そのように見ていた。

しかしわれわれはこの攻撃をはね返した。分割・民営化絶対反対の路線を一步も譲らず、揺るぎない団結を守りぬいた動労千葉の闘いがついに競りかかったのである。われわれが歩んできた

た道が正しかったことが実証されたのだ。この勝利の地平をストップとして、いよいよ、一〇四七名の解雇撤回、「本丸」JR体制打倒に向けて、総反撃の闘いに立ちあがろう。

## 情勢をきりひらいたストの決断

第一波・第二波ストは、国家をあげて強行された国鉄分割・民営化攻撃の本質を問う闘いであった。われわれは、この攻撃の本質を、国鉄労働運動を解体し、二〇万人の国鉄労働者の首切りを強行し、もって総評を解散に追い込み、日本の労働運動全体を解体しようとする、戦後史を画する重大な攻撃であると見すえ、まなじりを決して闘いに立ちあがった。

このとき国鉄労働運動をめぐる状況は、職場には怒りが満ちていたが、指導部は嵐のような攻撃の前に翻弄され、国労も含めて、反撃の手立てや方針を確立することができず、重大な危機にたっていた。

動労千葉は、自らの首をかけたストライキに立ちあがることをもって、①分割・民営化攻撃のどす黒い本質を赤裸々に暴きだし、②国鉄労働者の総決起を呼びかけ、③やりたい放題の国家的不当労働行為にさらされてきた国鉄労働者と政府・当局との力関係を逆転させた。

国労の修善寺臨大をはじめ、以降今日に至る国鉄闘争の一切は、この決断からはじまった。

動労千葉の第一波・第二波スト決起のインパクトが、国鉄労働運動の崩壊をくい止め、闘いの全ての土台をつくったと言っても過言ではない。

## 巨大な敵に挑んだ大勝負だった

この闘いは敵が最も恐れたものであった。旧動労・革マルまで抱え込み、後に中曾根が「日露戦争のとき以来のマスコミの協力」と称賛したほどの世論操作を行ない、とり得るかぎりの万全の体制をもって臨んだと考えていた政府と国鉄当局は大打撃を受け、狼狽して空前の大弾圧体制をもって襲いかかった。

ストに対し一万人の機動隊が動員され、「全員解雇!」のどろどろう喝が加えられ、前例のない大量処分が強行され、スト損害訴訟までかけられたのだ。以降十一年に及ぶ解雇撤回闘争も含め、この闘いは、わずか七〇〇名の動労千葉が巨大な敵に真正面から挑んだ大勝負であった。

## 困難な壁をつき破って

そのみならず、この解雇撤回闘争の前には、極めて困難な壁がたちだかっていた。国鉄攻撃が国家をあげた攻撃であったこと、公労法解雇の撤回はほとんど前例がないことだけではない。国鉄当局を相手取って解

(ウラハ續くん)